日本のユーモア 1

詩歌篇

織田正吉

日本のユーモア 1

詩歌篇

織田正吉

筑摩書房

日本のユーモア　1
詩歌篇

一九八六年五月十五日　初版第一刷発行

著　者　織田正吉
発行者　布川角左衛門
発行所　筑摩書房
〒101-91
東京都千代田区神田小川町2の8
電話(03)二二九一―七六五一(営業部)
二九四―六七一一(編集部)

印刷所　明和印刷
製本所　積信堂

© Shōkichi Oda, 1986. Printed in Japan. ISBN 4-480-35601-0 C0392

乱丁・落丁本の場合は，御面倒ですが小社読者係宛に御
送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

はじめに

笑いやユーモアに対する関心が最近にわかにたかまってきた。先に、『笑いとユーモア』（筑摩書房）という包括的な主題で、私は自分なりに考えた笑いの体系とユーモアの理論を述べたことがある。本書はその各論というべきものにあたり、日本人が長い歴史のなかでどのような笑いを求め、笑いをどのように取扱ってきたかということを、詩歌を材料に探ってみようとするものである。

詩情と笑いは日本人の感情のなかでは相容れないものらしく、笑いを含む遊びを動機として生まれた文芸は、つねに笑いを排除することによって完成し、あるいは、完成したと後世見なされるのである。和歌、連歌、俳諧すべてがそうであった。しかし、笑いは排除されてもしたたかに再生をくりかえし、またあらたな文芸形態を生み出す。日本の笑いの詩歌の歴史をひとことでいってしまえば、それの繰返しであるということができる。

標題は便宜上「ユーモア」という言葉を用いている。これは、笑い一般、ウイット、言語遊戯を含む広義のユーモアと解していただきたい。日本の詩歌に現れる笑いの多くはウイットとその関連の言語遊戯が主であり、それを抜きにしてこの本は成立しない。詩歌の笑いはさまざまな形をとって現れ、同時にいくつもの形式が並存するので、時代を追って述べようとすれば、当然、そこに無理が生じる

けれども、流れをとらえるために、あえて時代順に述べることにした。時代の下限は江戸期までとした。ごくおおまかにいえば、奈良期はユーモアを含むおおらかな笑いの時代、平安・鎌倉期はウイット、室町期に粗野ながら活力にみちたユーモアが生まれ、江戸期に入って詩歌のユーモアとウイットが集大成される。

素材として取上げた詩歌は、いわばサブカルチュアとして、ほとんどが学校で教える国文学史などでは切捨てられる部分である。そうして生まれた先入観によって幽玄や花鳥諷詠が日本の詩歌の伝統だと思っている人が、笑いと遊びの豊穣に驚かれることを私はひそかに期待している。本題からは、ややそれるけれども、これらの詩歌の作者について、必要と思われるものは、スケッチか略歴程度、触れてみた。芸能人的性格、世に容れられぬ欝屈を才能の誇示で晴らそうとする者、悠々と遊びに徹する作者というほぼ三つのタイプに分れる。そして、どこか満たされぬ者の淋しい横顔を持つ点で共通しているように思われる。

言語遊戯に限っていえば、すでに戦後間もなく和田信二郎氏のおそるべき博捜の書『巧智文学』が現れている。この上、何を加えることがあろうかという思いが絶えずあった。しかし、ユーモアとウイットを包括した視野から、日本の詩歌の笑いを一つの流れとして把握しなければならぬという使命感のようなものがどうしても私から離れないのであった。二十代の半ばから折を見てすこしずつ材料を集め、途中何度も中断を重ねているうち、私もようやく残された時間が気になる年齢に達した。専門の方には目だるく、誤りや遺漏の多いことをひたすら恐れながら、ひとり合点の使命感もだしがたく、ひとまずこういう形でまとめてみた。昭和五十三年に出版した小倉百人一首の成立新論『絢爛た

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

る暗号―百人一首の謎をとく―』（集英社）はその過程での副産物である。

物語、説話、随筆、戯作などの散文については、『日本のユーモア』古典説話篇として別にまとめるので、あわせてお読みいただければ幸いである。

資料を引用、参考させていただいた多くの先学と、原稿がととのうまで根気よく待ち、励ましてくださった筑摩書房編集部の柏原成光、祝部陸大氏に心からお礼申しあげる。

目

次

I　万葉びとの笑い

1　字謎の伝統　2

『万葉集』の戯書　「三伏一向夜」は「月夜」　文字の遊び　『万葉集』の用字法　額田王の難訓歌

2　畳句に遊ぶ　14

天武天皇の早口ことば　『古事記』のししづくし　同音のアクロバット

3　三題噺万葉版　20

滑稽歌人・意吉麻呂　円朝『鰍沢』のように　御機嫌をとりむすぶ歌

4　嘲笑歌とファトラジー　27

むなぎとりめせ　嘲笑の応酬　ファトラジーの発生　酒と恋の歌

Ⅱ　かなの発生と言語遊戯の展開

1　『古今集』のしゃれ　36

万葉がなから平かなへ　『古今集』のしゃれ——掛詞　縁語という技巧　『古今集』誹諧歌　謎かけの歌　『古今集』の笑いの歌

2　物名——言葉の隠し絵　47

言葉を隠す　『古今集』の物名　言霊としての物名　物名の名手・藤原輔相　俊頼の新風　もっとも美しい物名　頂点をきわめた也有

3　折句——遊びとしての暗号　62

かきつばたの折句　遊戯的暗号　折句による通信　後鳥羽上皇の折句判詞　沓冠——ダブル・アクロスティック　暗号通信　源順のあめつち歌　不遇をうらむ好忠の折句　職業歌人の不遇　定家の折句良経のかぞえ歌　為兼の三十三首歌

4　カリグラム　89

双六盤の歌と碁盤の歌　木綿襷の登場　後水尾天皇の木綿襷

Ⅲ　機知の応酬

1　さまざまな歌合　106

歌のコンテスト　亭子院女郎花合　宇多院物名歌合　なぞなぞの歌合

2　連歌の展開　113

ウイットの応酬　連歌の芽——短連歌　問答歌の系譜　俊頼の滑稽問答　いろは連歌　賦物の発生　さまざまな賦物　複雑化するルール　賦物の形式化

3　ユーモアの復活　128

誹諧の連歌　『竹馬狂吟集』　『犬筑波集』のエロティシズム　ウイットとユーモアの結合　なぞなぞの付合　和歌のパロディー　哄笑の牙を向ける野犬

Ⅳ 川柳への道程

1 貞門と談林 144

貞門の俳諧　松永貞徳　貞徳の俳諧　付句の量産　前句付の源流
遊びとしての制約　川柳を生む原動力　談林の俳諧　自由な句風

2 回文——シンメトリの美学 165

回文の俳諧　日本の回文略史　素更の『俳諧廻文帖』

3 雑俳の流行 174

前句付の流行　笠付系の雑俳　折句系の雑俳　物名系の雑俳　回文系の雑俳　その他の雑俳

4 前句付から川柳へ 187

前句付の点者・柄井川柳　『武玉川』から『柳多留』へ　十七音の人生詩　川柳作者としての「庶民」　川柳の盛衰　時代を超える句

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

川柳のうがち　川柳のレトリック　謎仕立ての詠史句　人間のドラマ

V　狂歌の盛衰

1　狂歌の源流　208
和歌の中の狂歌　源流としての落首　狂言の中の狂歌　歌合のパロディー　『永正狂歌合』　細川幽斎とその周辺
2　大坂から江戸へ　217
雄長老の『詠百首狂歌』　パロディーの大作『吾吟我集』　卜養狂歌のたのしさ　その他の貞門狂歌　大坂の狂歌　天明狂歌の勃興
3　狂詩の流行　229
寝惚先生と銅脈先生　南畝の狂詩

4 狂歌の技巧 234
両義性の利用　精緻な掛詞　縁語の多用　謎かけの方法　饅頭に寄する恋　見立　パロディーとしての狂歌　背景にある教養　狂歌の理屈っぽさ　言語遊戯の終着　手柄岡持の『我おもしろ』

5 狂歌の題材 253
心の狂の歌　日常生活を詠む　飲食を詠む　酒の狂歌　金銭、経済生活を詠む　肉体を詠む　身近な小動物を詠む　遊興を詠む

6 狂歌の衰退 265
蜀山人・大田南畝　狂歌の衰退

詩歌の笑いと日本人——あとがきに代えて—— 271

テキストおよび主要参考文献 276

I

万葉びとの笑い

1　字謎の伝統

『万葉集』の戯書

たらちねの母が飼ふ蚕の繭ごもりいぶせくもあるか妹に逢はずして　（巻十二）

垂乳根之　母我養蚕乃　眉隠　馬声蜂音石花蜘蛛荒鹿　異母二不相而

（大意――蚕のさなぎが繭の中にこもっているように心がうっとうしい、妻に逢わずにいると）

日本の文学、中でも詩歌に残されたユーモアとウイットの系譜をたどるのに、まずこの歌を採りあげることから始めよう。『万葉集』はいわゆる万葉がなで表記されており、原文はここに掲げたとおりだが、「馬声蜂音石花蜘蛛荒鹿」を「いぶせくもあるか」と読ませている。「いぶせく」は他の歌で見ると、「欝悒将レ有」（いぶせくあるらむ）、「情欝悒」（こころいぶせみ）と表記されているのがふつうである。この歌の「馬声」は馬のいななきで、現代の私たちは「ヒーン」と聞くけれども、万葉時代の人はそれを「イーン」と聞いたらしく、「馬声」は「イ」、蜂は「ブーン」と飛ぶので「蜂音」に「ブ」という擬声語を用いている。「石花」は現在カメノテと呼ばれるえびかに類の海の動物の古名で

「セ」、「蜘蛛」は「クモ」、「荒鹿」は「アルカ」という動物づくしの遊びをまじえた表記法である。

かくしてやなほやなりなむ大荒木の浮田の社の標にあらなくに　（巻十一）

如是為哉　猶八成牛鳴　大荒木之　浮田之社之　標尓不有尓

（大意――こうしてやはり老いていくのだろうか、大荒木の浮田の社のしめなわでもないのに）

この歌では「牛鳴」を「む」と読ませている。現代の人が「モォ」と聞く牛の鳴き声を「ムー」と聞いたのであろう。『万葉集』は万葉がなというきわめて不便な表記法を逆手に取って、文字の遊びをたのしんでいるのである。遊びをまじえたこのような表記を『万葉集』の「戯書」と呼んでいる。

つぎの歌では「追馬」を「そ」、「喚犬」を「ま」、「喚鶏」を「つつ」と読む。当時の人びとは馬を追うとき「ソ」、犬を呼ぶとき「マ」に近い声を出していたらしい。現在ではニワトリを呼ぶとき「トォトォ」と呼ぶが、「つつ」はそれに近く、「ツーツー」とでも発声していたものであろう。

宮材引く泉の杣に立つ民の休むときなく恋ひわたるかも　（巻十一）

宮材引　泉之追馬喚犬二　立民乃　息時無　恋渡可聞

（大意――宮殿の建築用材を伐り出す泉の杣山の使役に使われている民のように、私は休む間もなく恋しつづけている）

（略）玉こそば　緒の絶えぬれば　くくりつつ　またも合ふといへ　またも逢はぬものは　妻にしありけり　（巻十三）

玉社者　緒之絶薄　八十一里喚鶏　又物逢登曰　又毛不相物者　嬾尓志有来

（大意――玉なら緒が切れたらくくっておけばまた合うというのに、またと逢わないものは妻であった）

杣は植林しそこから木材を切り出す山である。原文は「そま」を「追馬喚犬」と表記している。簡略化して「犬馬」で「まそ」と読ませ、「まそかがみ（真澄鏡）」を「犬馬鏡」と表記した歌もある。後の歌の「八十一里喚鶏」は「くくりつつ」である。「八十一」は「九×九」で「くく」。掛算を利用した戯書については後で述べる。

ささなみの志賀津の浦の船乗りに乗りにし心常忘らえず　（巻七）

神楽声浪乃　四賀津之浦能　船乗尓　乗西意　常不所忘

（大意――志賀の浦で船に乗るように、私の心に乗りかかったあの人のことがいつも忘れられない）

志賀の枕詞「ささなみの」の「ささ」を「神楽声」で表している。『日本書紀』（巻九）歌謡に「塡（あ）さず飲（を）せ、ささ」とあるように、「ささ」は神楽（かぐら）のはやしことばである。「神楽声」を「神楽」、さらに略して「楽」だけで「ささ」と読む歌もある。

「三伏一向夜」は「月夜」

日本のめずらしい姓に「月見里（やまなし）」「小鳥遊（たかなし）」「栗花落（つゆ、ついり）」などがある。月がよく見える里は「山無し」、小鳥がのびのびと遊ぶのは鷹がいないから「鷹なし」、栗の花が落ちる季節は梅雨の入り（ついり）という謎かけによる訓である。『万葉集』にはこれとおなじ趣向

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com